

極私的感想

佐藤信

第30回 OMS 戯曲賞、ことさらしく襟を正すということでもないが、第1回から「選考」というお役目を預かっている身としては、あらためて「賞」という営みの意義というか役割について思いをめぐらすきっかけになった。

これまでこころがけてきたのは、まず、応援団としての役割。選考のディスカッションであれ、対面の選評会であれ、交流会での対話であれ、とにかく「フレー、フレー」を念じながら、毎回、ひたすらテンション高く（瞳孔やや開き気味で）臨むことをこころがけてきたのは、ひとえにこの理由による。

ふたつ目には、他人様の創作活動に偉そうに蘊蓄をかたむけ、さらには「選考」などという上から目線を行使するにあたって、常に、劇作家という同業者として、おのれ自身の作品を担保として差し出さなければならないという覚悟だ。その意味で、創立53年目を迎えた仲間の集団（劇団黒テント）に新作を書き下ろした今年（2023年）は、幾分、肩の荷が軽かったし、その分、鼻息も多少荒かったかも知れない。

そしてみつつ目。完成度よりはオリジナリティという絶対基準。具体的には、自分よりもうまい人（しょっちゅう出会う）ではなくて、自分がいままで考えたこともない人との出会いを待ちのぞむという姿勢だ。

ということで、選考経過については吉永美和子さんの報告におまかせして、ここでは、最終候補6作品について、選考会を終わったあと（お役目終了後）の極私的な感想をひと言ずつ。

伊地知克介さん、『月と首長竜』。戯曲を書くということへのワクワク感と戯曲を基本的に「詩」としてとらえている姿勢に好印象を持ちました。でも、この題材の料理には、あと三倍ほどの時間をかける必要があるのでは、というのが率直な感想です。

キタモトマサヤさん、『灯灯ふらふら～the light is still blinking～』。実年齢80歳を迎えた身としては、どうしても主人公タカシの年齢設定80歳にこだわってしまいます。過不足なく描かれた限界地域のドラマに、作者が踏み込めないもっと大きな余白を感じられたら。

坂本涼平さん、『さよならの食卓』。佳作受賞、おめでとうございます。論文を執筆の際、たくさん参考文献を読む必要があるのは、書こうとしている論文の材料を得るためではなく、書こうとしている論文の主題が、他の誰かによって証明されていないかを確認するためです。腰を据えた作業の、一層の積み重ねを期待します。

武田操美さん、『みえない』。大賞受賞、おめでとうございます。演劇という営みの本質をきちんとおさえている直感を大切に、大きな飛躍を期待しています。ちょっと意地悪な（人を楽しませる）道化の精神は、日常ではなく舞台の上でこそもっと生かされるはずだと思います。

筒井加寿子さん、『ヒロインの仕事』。たしか人間が、いま、そこにいるという作者の誠実さを感じる作品でした。でも、その人々が生きている世界が幼すぎる。「文化芸術」という言葉づかいを含めて、劇作家としての視線をもう少し広く、もう少し遠くまで。

中村ケンシさん、『コクゴのジカン』。完成度の高い力作でしたが、コクゴのジカンが作品の主題であったのか、それとも構成上の仕掛けであったのか、最後まで判断に苦しみました。主題であれば2011年3月11日はもっともっと深める必要があったし、仕掛けであれば設定を変えたほうがよかったのでは？

第31回へのご応募を期待しています。選考をつとめる責任をはたすため、ぼくもまた新作に取り組みます。